

溝上慎一の教育論(動画チャンネル) No314

(新著の紹介)

生成AI時代にレポート課題の意義と可能性を「再発見」する 成瀬尚志先生(大阪成蹊大学経営学部 准教授)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長(2020-2021年)。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究受託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)

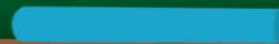


成瀬 尚志
なるせ たかし

大阪成蹊大学経営学部・准教授

神戸大学大学院文化学研究科博士課程修了。博士(学術)。専門は哲学・高等教育。長崎大学大学教育イノベーションセンター(教育改善部門長)等を経て2019年4月より現職。

単著『レポート課題の再発見』(ひつじ書房, 2024), 編著『学生を思考にいざなうレポート課題』(ひつじ書房, 2016), 共著『信頼を考える: リヴァイアサンから人工知能まで』(勁草書房, 2018) など。





成瀬尚志 (2024). レポート課題の再発見 ひつじ書房
(2024年11月刊行)

- 第1章 なぜレポート課題について考える必要があるのか？
- 第2章 教員の「ねらい」とその4分類
- 第3章 レポート論題の4分類と評価のためのアプローチ
- 第4章 具体的な論題の設計と制約条件
- 第5章 学生に「レポートガイドライン」を提示する
- 第6章 ライティング教育としてのレポート課題—誇り高い書き手を育てる

それではご覧ください

生成AI時代のレポート課題

成瀬 尚志

大阪成蹊大学

- 生成AIの登場により、レポート課題は存亡の危機に瀕している。
- このまま大学教育の現場から消え去ってもよいのか？



* 論題：レポート課題における教員からの指示文

- **選択肢 1: AIプルーフな論題***

- AIで書けない論題はほとんどないと言える。
- AIを使いたければ使ってよいが、「それだけでは「書く力」が身につかないよ」というスタンスしかないのではないか。
- 学生から「この課題で本当に力をつくのですか？」と問われたとき、具体的に答えられる準備があるだろうか？

- **選択肢 2: AIを活用しながら書ける論題**

- AIの活用を前提としつつ、学生の貢献を引き出す設計が求められる。
- AI活用を前提としない場合でも、レポート課題で「どのような貢献」を求めるかをこれまで検討してきたかどうか？

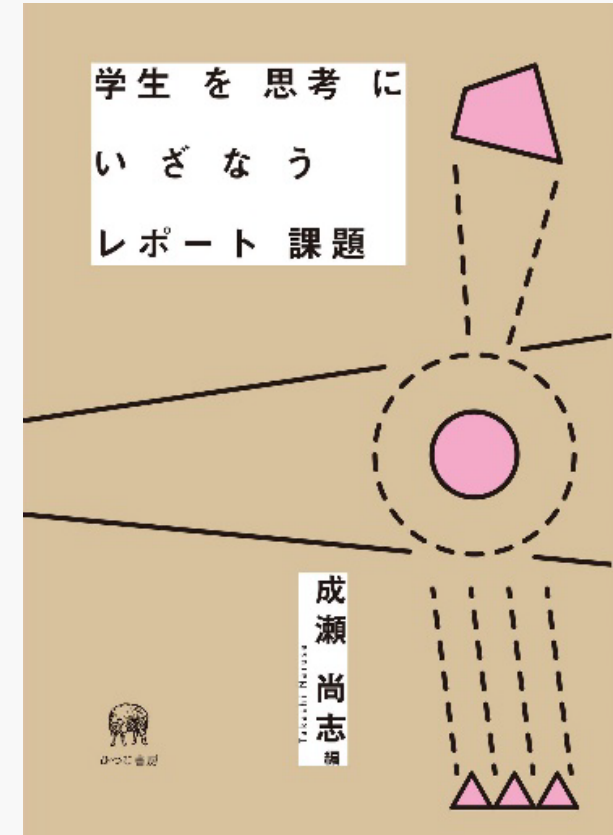
- この課題で学生に**どのような貢献**を求め、それが**本当に力につながる**設計になっているかを、これまで十分に検討してきたかどうか？

コピペレポート問題

- かつての「コピペレポート問題」では、不正防止が中心
- レポート課題で、**どのような貢献を求めるかや、どのような力が身につくのか**という**本質的な問題**について、これまで十分に検討されてこなかったのではないか。
- AIが新たに問題を生んだのではなく、**既存の課題が顕在化した**だけではないか。

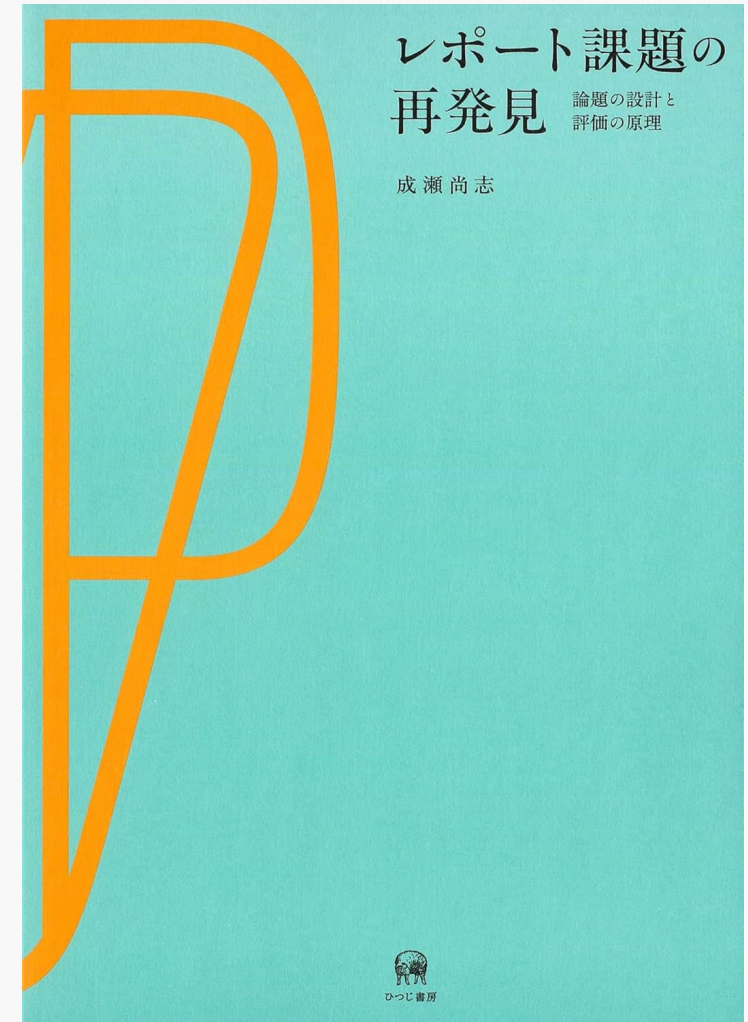
レポート課題の再設計

- AI時代において重要なのは、**学生に求める具体的な貢献**を示し、課題を単なる成果物ではなく**学習の機会として再設計**することである。

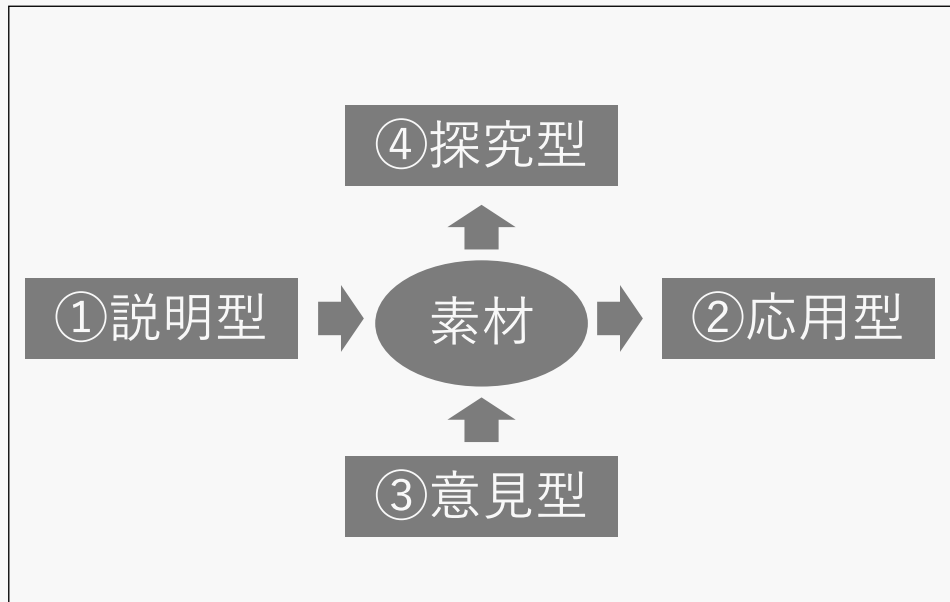


成瀬尚志編著『学生を思考に
いざなうレポート課題』ひつじ書
房、2016年

- 第1章：なぜレポート課題について考える必要があるのか？
- 第2章：教員の「ねらい」とその4分類
- 第3章：レポート論題の4分類と評価のためのアプローチ
- 第4章：具体的な論題の設計と制約条件
- 第5章：学生に「レポートガイドライン」を提示する
- 第6章：ライティング教育としてのレポート課題—誇り高い書き手を育てる



素材に対する論題の4分類



- 1 説明型：素材について説明を求める論題
- 2 応用型：素材を踏まえて応用や活用を求める論題

授業で学んだ「功利主義」を用いて説明できる現代社会の具体例を取り上げ、その例がどのように社会全体の幸福を最大化しようとしているかを説明しなさい。
- 3 意見型：素材についての意見や主張などを求める論題
- 4 探究型：素材に関する問いを立てその答えを論じることを求める論題

京都大学でのレポート課題

以下の（ア）～（エ）のうちから1つを選び、テキストおよび講義内容を参考にして、

(a)それがどういう問題なのか、(b)その問題についてどういう立場が存在するのか、

さらに(c)その問題について自分は今のところどう思うかを書ける範囲でのべよ。（1000字以内）

（ア）生物学における還元

（イ）心のモジュール説（テキスト143-152ページ）

（ウ）科学至上主義（テキスト154-159ページ）

（エ）価値観の科学への影響（テキスト166-173ページ）

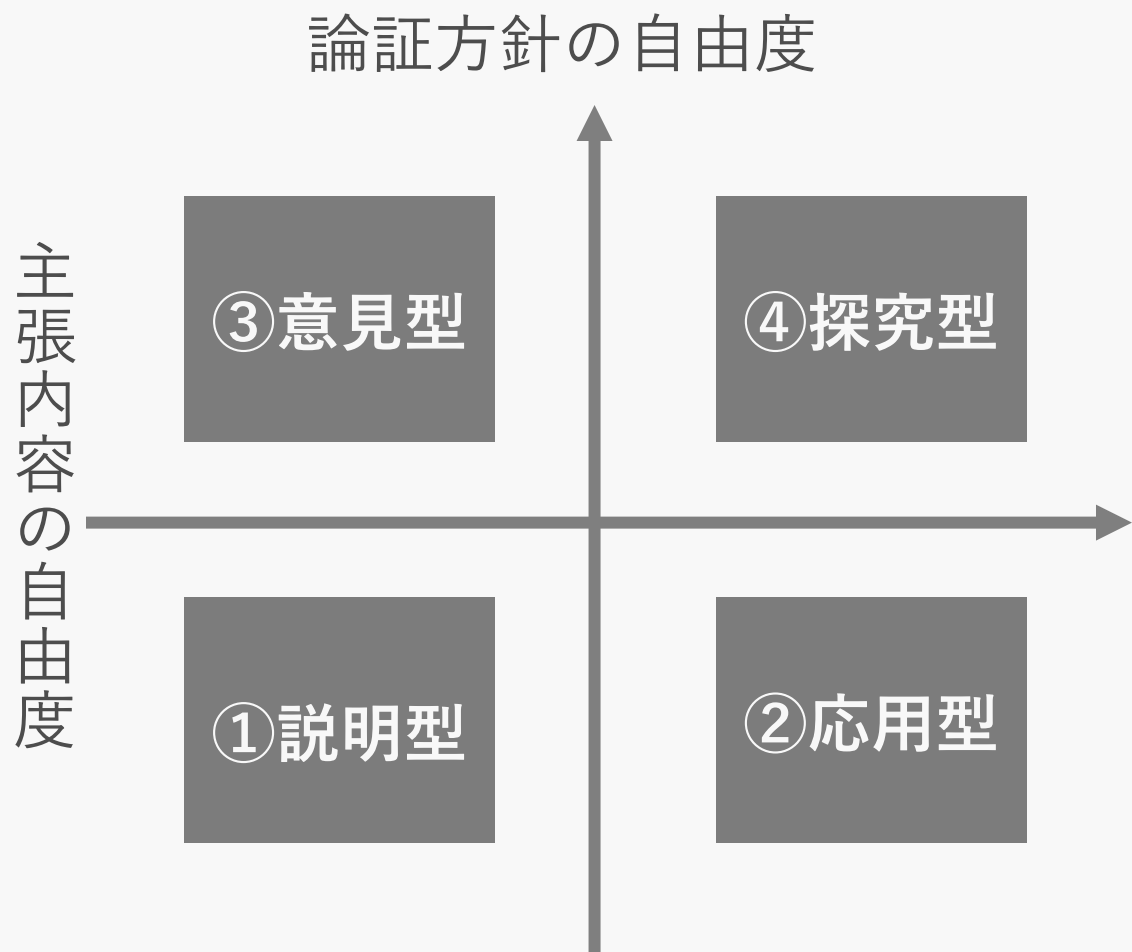
京都大学の伊勢田哲治先生
に提供していただいた論題

- ① 今日の授業で学んだこと（授業のポイントをまとめるように心がけてください）
- ② 授業を聞いて考えたこと（自分の意見や考え、わからなかったことなどを理由とともに説明しましょう）
- ③ おたより（感想やコメント、授業に対する改善点など）

注意事項

- ①（300字程度が目安です）を中心に②と合わせて400字以上（399字以下の場合や①が200字以下の場合には減点となることがあります）。
- 回答の前に①、②、③などの数字を書いておいてください
- 授業のポイントが理解できていることがわかれば2点

2つの自由度による分類



成瀬 (2024)

- **論証方針の自由度の低い論題**
 - 初年次や基礎段階で有効。
 - AI利用：学生の寄与分がなくなるので有効活用は困難
- **論証方針の自由度の高い論題**
 - 難易度は高いものの、考えを深める余地があるので書く力は身につく。
 - AI利用：学生自身が自律的な書き手として対話的利用できれば有効。

1. 自律的な書き手を育てる（自律の重要性）

- AI時代では、**学生が自律的に取り組む**方向性以外に道はない。
- 学生が「自分で考え、書く意義」を感じられる論題（や授業）を設計することが求められる。
- レポート課題は、単に「紙を直す」のではなく、「**書き手を育てる**」ための場として位置づけるべきである。

2. 自信を持てる成果物（成果への自信）

- 学生が「このレポートは自分の成果物だ」と**胸を張れる**ことが重要である。
- そのためにも**オリジナリティを求め、それを適切に評価**することが不可欠である。
- どのようなオリジナリティを求めるかは教員の腕の見せ所であり、**学生が本気で取り組みたくなるような魅力的な論題**（や「見せ場」）の設定が求められる。

3. 誇り高い書き手を育てる（社会的責任と貢献意識）

- AI時代だからこそ、**学生が自ら「書く力」に価値を見出し、責任を持って表現する「誇り高い書き手」**を育てることが求められる。
- レポート課題をライティング教育の機会と位置づけ、**カリキュラム全体で、学生が体系的に成長できるように設計**することが重要である。